

「天に背く」

「もう、飽きた。」

この世界も、人も、全部。

他人の気持ちを汲み取ることは美德だ。でも、それは一種の自己犠牲を孕んでいるともいえる。他人を想うこと_____これは俗の性善説_____は、他人に対する信用が根底にある限り、「良心」が自動的に作用し、ある意味での思考と行動の相違、いわばパラドクスを抱えてしまうことも顕著だ。

秋。心地よい風。

誰もいない屋上。ここは今の私にとっては最後の楽園。

いや、最後なんかじゃない。これは「今」という時間の中での話。

高校に入学してから、もう半年。

“友達に恵まれた”中学生活が終わり、新天地に赴く私を、彼女たちはその「笑顔」で見送ってくれた。かつてのその「友達」の中にも、今の私と同じ、この高校に進学した子もいる。

彼女たちも「優しく」「笑顔」で、私と接してくれる。

_____放課後、帰路。

少し痛む右手薬指の傷を左手で隠し__いや、押さえながら、ゆっくり歩いた。

今日の夕日は、どこか、いつものそれとは違って見える。

いや、いつものそれを明確に思い出せない私が考えることではないか。

そう思い直した。

家に着くと、両親の姿は無かった。

散らかった部屋とかごに入ったままの洗濯物を見ると、理由なんか考えるまでもなかった。

とりあえず、テレビのスイッチを入れた。

特に理由なんて無い。

強いて言うなら、気を紛らわすためだ。

「次のニュースです。先日から観測が相次いでいる重力波についての最新情報です。」

よく同じ日本語なのに言語が認識できないときがある。
ソファーでうたた寝をしているとき、意識が朦朧としているとき。
まさに今だ。

アナウンサーの単調で冷淡な声が、静かに、心地よく感じられ、それが徐々に離れてゆく。

「遥花。起きなさい、遥花。」

静寂な闇が徐々に明るんでゆく。ゆっくり意識が覚醒する。

「こんなところで寝ていたら風邪ひいちゃうわよ。」

この声はおそらく母の声だろう。
優しい声だ、聞き慣れた声だ、と頭で考える。しかし、私はそれを拒否する。そうせざるを得ない。

_____思考はどんどん拍車がかかり、自分の意思とは相反し暴走を始めた。

「どうして？なんで私を傷つけるの？なんでいつも私ばかりが苦しむの？」

それが誰に向けた言葉なのか。私には分からない。
少なくとも分かるのは目の前には母が立っていて、私は、いや、私かどうかも分からない、独立した思考____存在____が暴言を吐いている。

気づいたときには家を飛び出していた。
私は幼い頃からネグレクトの両親の家庭で育ち、虐待と呼ばれるものを受けてきた。
「友達」が心配してくれている。心配してくれて、いる。心配し、て、くれて、いる。

走った。何分くらい走っただろう。
痛みが急激に、私の頭を締め付ける。これは酸欠か。いや、別の...。
少し横になろうと思い、近くの大きな河川敷の橋の下に身を隠した。

頭痛はなおも脳の両側を締め付ける。

何分か。何時間か。何日か。

どれくらい時間がたったのか分からない。

けど誰かがいる。目の前に。私のそばに。

「遠い昔、人類は幾度も神に挑もうとした。神に近づこうとした。バベルの塔は、人類が作り上げた最大の信仰と冒涇ともいえよう。人々は神の怒りを知らず、神は人々に裁きを下す。」

「...ん。」

ゆっくり目を開けて、声のする方を見る。

「あ、ごめん。」

そこにいた私と同じ年くらいの男の子は、真っ先に私を起こしてしまったことを詫びた。

「あなたは...？」

「僕は、知史。高校生 1 年生。」

やはり同じ年だ。

「なにを読んでいたの？」

「ああ、これ？昔の神話とか書物の内容をまとめた本だよ。もしかして興味あるの？」

私の問いかけに彼はどこか嬉しそうに聞き返した。

「べ、別にないかな。」

「あ、うん、そうだよ。」

彼は少し落ち込んだように見える。

彼の表情は豊かだった。なぜそう感じるのかは、そこまで分からないけど。

「そういえば、君、名前は？制服着てるから高校生...だよな？」

「うん。私は遥花。駅の向こうの高校に通ってる。あなたは？」

「知史でいいよ。僕は、この川の向こうの芸術高校に通ってる。」

「げ、芸術？」

彼はそんな風には見えない。むしろ学問を究めていそうなタイプ。

「....。」

「どうした？ 遥花。」

少しボーっとしていた私に知史が尋ねる。

「いや、ちょっと悩み事。」

「悩み？ もし僕でよければ聞こうか？」

彼はいたって真剣な表情で私に訊く。

「実は....。」

何から話そうか迷ったが、結局純粋な今の感情を言葉にしようと努力した。

「私、お父さんやお母さんから、虐待、みたいなもの、受けてたんだ。」

「...うん。」

「それでね、よく友達が慰めてくれるんだけど....。」

「...うん。」

彼は、頷くばかりだった。適当に受け流しているようには見えなかったけれども、念のため「聞いている？」と訊くと、「...うん。」と変わらぬ返事をした。

「つまり_____」

私が話し終わったとき、すぐに彼は口を開いた。

「.....遥花はこの世界に飽きたんだ。」

「飽きた....。」

その言葉は、なぜか物凄く的確で、論理的な感じがして、まるで今の私の複雑なこの心情をすべて一括りに統制しようとしている様とまで思った。

今までの自分。自我。もう取り返しのつかないくらい、混迷し、分からなくなっている。

分からなくなってしまった...。そう、「それは」事実だ。ならば一度リセットしてしまえばいい。

記憶も歴史も、何もかも全て。新しい自分を作ればいいのだ。

彼の言葉は、そう、私に告げているように思われた。

「行こう。一緒に。新しい世界へ。」

「...え？」

唐突だった。彼は、真剣な表情からいつの間にか、気分の高揚が感じられるくらい生き生きとしていた。

「新しい世界って？」

「それは行ってみてからの楽しみだよ。」

彼は私の手を引っ張り、走った。

私も、自分自身が不安を装っていることにすぐ気づき、正直になろう、と思い直し彼に導かれるがまま走った。

彼と私は最寄りの私鉄駅まで走った。

私はここで初めて時刻を確認する。最終電車が丁度発車したくらいの時間だった。

「もう電車来ないよね？」

私が尋ねると、

「来るよ。」

彼は即答で断言した。

駅員に、「ホームに落とし物をしてしまったんだ」と嘘をつき、構内へと入る。

「...やっぱり来ないよね？」

「いや、来るよ。」

彼は、一点張りの自信を変えなかった。

しばらくして、遠くに光が見えた。

建物の光かと思ったが、どんどん近づいてくるそれは紛れもなく電車だった。

ホームに電車が入線しブレーキ音が響く。

「え、最終電車って今日遅延してたの？」

彼に訊くと、
「まあ、乗って。」

それだけだった。

好奇心と不安の板挟みの中、電車に乗った。
ドアが閉まる。アナウンスは無い。電車の中は当然ながら誰もいない。
静寂。声もしない。
いるのは私と彼のみ。

「...。」
「.....。」

やがて少しの沈黙が続き、

「なあ。」

先に彼が私に問いかけた。

「遥花。君は、本当に「嘘」をつくのが上手だ。」
「えっ？」

どういうことか分からなかった。

「君の家族は、君に虐待なんかしない。君を虐げ、君を侮辱し、苦しめているのは、君の言う「友達」じゃないか？きっと君は嘘をついている。それは僕にだけではない。遥花自身にも。」
「.....。」

私は思考が錯乱し、彼から目を背けたが、改めて彼に向き直ると彼の表情は「現実」を私に突き付ける恐怖ではなく、私を束縛から解放しようとする「救い」になっていた。

「あれ....なんで？」
私は涙が止まらなくなった。

きっと、私は両親に甘えていたんだ。
学校で受けたストレスやいじめは、両親のせいにして、向こうでは、「優しく」「笑顔」で、「友達」

と接していた。不満発散の術を失ったその様子は、完全な適応障害とも見て取れる。
ここで、私は「自分」を押し殺していた自分に気が付いた。
私は人生で初めて自分を「俯瞰」したのだ。

これに気づく「恐怖」「絶望」。その目先の感情から逃げて、逃げて、逃げ続けて...

そんな弱い自分を知ったとき、私は初めて前を見た。
彼は私を的確に見抜いていた。

走りだした電車。

新しい世界。

私はまた一歩、いや何十歩も前に進んだ。

「ありがとう...。知史くん。」

私が言うと、彼は優しい表情で静かに頷いた。

その表情にはどこか「重荷」が取れたような感じがしたけれど、たぶん考えすぎかもしれない。

電車は発車後も一切アナウンスは無く、東京の都心に向けて走り続けていた。
突如、電車の周囲に煌びやかに光っていた電灯や街の明かりが消えた。

轟音と共に、風のふく音が聞こえる。_____トンネルだ。

「知史くん。この路線にトンネルなんてあったかな？」

「....。」

しばらく黙り込んだ後、

「ないよ。」

そう私に告げた。

「遥花。この電車が行きつく先は、新しい世界なんだ。」

「...うん。」

私が頷くと、電車はトンネルを抜けた。

その瞬間、私は見えている風景を疑った。

電車の外には、東京タワーくらいの高さはあるだろうか、摩天楼が群を成し、音速は超えているであろう飛行機のようなものが飛び交っていた。

「....。」

外の景色に呆然と立ち尽くす私に、彼は冷静に説明をはじめた。

「こんなことを考えたことはないか？もし第二次世界大戦の結果が変わっていたら。現実とは「異なる歴史」を歩んだ世界があったら。」

その言葉を聞き、私はすべてを察した。

ここは平行宇宙。今までの歴史は、この世界には、存在しない。

直感がそう言う前に、現実の風景が私に語り掛けてくる。

「そろそろ駅だ。降りようか。」

電車は徐々にスピードを落とし、アナウンスもないままドアが開いた。

ホームに降りる彼。そのさらに向こう側を見てみると、そこには不気味な黒い建造物があった。それは、視認できないほど高く、幅も広がった。よく見るとそれは何キロも先にある様だった。

私がホームに降りようと、足を踏み出そうとしたとき。

__ドンッ！

彼は私を思いっきり電車に押し戻した。

その衝撃で私は後ろにこけた。

「な、なにをするの??」

「...君はこっちに来てはいけない。」

「...えっ？」

「僕は君とお別れするために、この世界に来たんだ。」

「え、ど、どういうこと!？」

動揺する私をよそに彼は私から視線を離すことなく、

「遥花。君はもう以前の君じゃない。現実を生きることができるほど強くなった。だから_____

_____戻るんだ。」

その言葉を聞いた、認識した、その瞬間に。

真っ暗な闇に私は落ちて、

それから……。

ピッ_____ピッ_____ピッ_____

単調な電子音。微かに聞こえる鳥のさえずり。

目を開ける。

「…んん…。」

私は…眠っていた??

そう考えると同時に、カーテンや様々な機器の姿が目に入った。

間違いなく病院だ。私はさっきまで、彼と居たはず。

しばらくして、病室の戸が開いた。

母親の姿。私を見るなり驚き、駆け寄って、涙を流した。安堵の涙だ。

やはり彼の言った通り、私の両親はそんなことはしないということを再確認した。

「私、なんで病院にいるの?」母に問いかけた。

母は、覚えていない私に驚くことなく、話した。

「遥花は、一昨日の夕方、処方されていた精神治療薬を過剰に服用して、意識不明になっていたのよ。お医者さんは遥花が統合失調症の可能性があると saying いたわ。」

「統合失調症...。」

もはや衝撃は無かった。そんな気がしていたから。

そんな気がしていた自分を押し殺していたから。でも、もうそれは過去の話。

「お母さん。」

私はさっきまでに経験したことを話した。

病院の退院までそんなにかからなかった。

私は母の言う通り、ある場所に向かっていた。

と、いうのも母は知史という名前の高校生を知っていた。

過去に市役所に勤務していた時に、当時の同僚に知史の父が居たというのだ。

しかし現在、彼は「行方不明」として、捜索が行われたが発見には至っていないのだそうだ。

「こんにちは。」

インターホンもないその家から出てきたのは背の高い男性だった。

「今日は遠いところからわざわざすまないね。」

「いえ、とんでもないです。こちらこそ、無理を言ってご自宅まで来てしまって...。」

「気にしなくていいよ。」

男性は続けて、

「遥花ちゃん、君はわたしの息子、知史のことを知っているんだってね。」

「はい...。」

知史の父は少し間をおいて、

「ということは、知史の_____」

そう言いかけて再び黙りこんだ。

「どうかされましたか？」

私が訊くと、

「いや、何でもない。」

と、適当にはぐらかされた。

「ところで知史とはどこで会ったんだい？」

「荒川の河川敷です。」

「...申し訳ないのだが....連れて行って欲しくないか。」

「え？は、はい...良いですけど。」

知史の父は、何かを隠している。そう感じた私は、知史の父の車に同乗し近くの河川敷に案内した。橋のすぐ横の階段を下りる。そして橋の下へ。

「ここです。」

「...。」

知史の父は黙って川の流れを見つめていた。

「あの...？」

「ここはね、知史がよく独りで来ていた場所なんだ。丁度あのあたりに座ってたかな。」

その指差す先は、私が昏睡中の夢で見た場所と一致した。

よく見ると何かが落ちている。

近くまで歩いて、気づいた。本だ。

「この本...。」

ページをめくって、探して、見つけた。

「バベルの塔。」

知史の父は、私が拾ったその本を見るなり、

「.....ありがとう。その本は、知史がどこへ行くときも持ち歩いていた本なんだ。だから絶対に知史はここにいた。遥花ちゃん、君には本当のことを話そうと思う。」

僕は馬鹿だ。迂闊だ。早計だ。

どうして強がったりしたんだ。

どうして彼女、遥花を自分から切り離れたんだ。
言語も空気も何もかも違うこの世界で、僕は生きていけるはずなんかないのに。

新しい世界。新しい自分。

言葉を並べてみれば理想的な光のよう。
だが現実との相違は深刻なジレンマやパラドクスを生む。

そんなこと...わかっていたのに。分かっていたのに....。

僕は知っていた。小学生の頃から、見えないものが見え、それが普通だと錯覚していた。
成長し、物心がついてくるにつれ、その正体が平行宇宙であることに気づいた。

いつか脆弱な、現実での己の精神に嫌気がさし、逃避し、平行宇宙に希望を抱くようになっていた。

それがこんな結果なのかよ。

地下道の隅。コンクリートが肌寒い。一体何日経っただろうか。
バッグに入っていた手持ちの食料も尽き、あとは死を待つのみ。

「もう、僕は駄目だな。」

葛藤と誘惑の末、遥花をこの世界に連れてきたのに、結局押し戻した。
この判断は正解だ。間違っていない。少なくとも「あの世界」で生きていくのであれば、だが。

「これは...？」

「知史のスケッチブックだよ。芸術高校に「通いたかった」とずっと言っていたんだ。母さんも俺もそれには賛成だった。けれども中学校を途中で不登校になったのが良くなかった。」

「....そうだったんですか。」

私は許可をもらい、スケッチブックを開けた。

荒川の風景画や自然を描いたものから、リアルな人物画も描かれていた。

あたかもデッサンをしたかのようなクオリティだった。

順番にページをめくる。

「君を助ける」

その文字がページの端に書かれていた。そしてそのページには、

「...えっ...？」

紛れもなくそこには自分の姿が描かれていた。

それも正確に。はっきりと。

「知史はね、君のことを昔から知っていたんだよ。」

「どういうことですか...!？」

私は動揺を隠せなかった。

「詳しいことは分からないが、何年か前にこう言っていた。」

『ここじゃない世界に遥花という子がいる。僕の大切な人なんだ。』

僕の大切な人。

かけがえのないその人は、何年も前に亡くなった。

勿論、それは現実の話じゃない。自分だけが見ていた平行宇宙での話。

平行宇宙の遥花もこちらと会話ができ、お互いの悩みも秘密も共有していた。

だが、最後の最後になって彼女の、最大の悩みを知った。

それが自分への「嘘」だった。今までの悩みの共有、相談、そのすべてを考察した時、彼女の抱えていた闇が見えてきた。そして長い間考えた。彼女を「助ける」方法を。

そして、奇跡が起きた。

現実に彼女は居た。

そして彼女の悩みを取り払った。だがこれも思いこみだと僕は思っている。

僕の妄想なのではないか、と。

本当は彼女への未練を断ち切るために自分の脳が見せた錯覚なんじゃないか、と。

私は家に帰った。

しばらく、譲り受けた「バベルの塔」を私は読み進めていた。

「そういえば...。」

あの時ホームから見えた黒くて大きな建造物。

それは今思えばまるでバベルの塔のようにも感じられる。

スマホを開け、今日撮った、スケッチブックの写真を見してみる。

やっぱり何度見ても私だった。そして同時に私は「助けられた」事実がある。

彼の言葉が無ければ、私は永遠に自生思考の悪循環にさらされ続けていただろう。

ふと、ニュースの通知。

「政府が説明拒否。米軍の空母数隻を中心とする艦隊が横須賀に現れる。」

私はよくわからない不安感というか焦燥感に駆られた。

___その時だった。

ドドドドド.....

物凄い地鳴り。轟音。今までに聞いたこともないような耳をつんざく高音。

尋常じゃない何か異変が起きていることは自明の理だった。

窓を開け、外の様子を見た。

「なにあれ....。」

東京都心の方向に戦闘機が飛んでいる。

いや爆撃機か。東京都心を空襲している様にも見える。

「.....大切な人。」

昏睡中の夢。あれは、夢じゃない。紛れもなく現実。
そして、平行宇宙の存在も現実となった。つまり、知史は本当にあの世界に行ってしまった。

私を救った彼は、
今この世界には存在しない。

「今の私に.....何が出来る？」

戦闘機が飛び始めた。
僕は、なんとかして元の世界に戻る手段を探した。
ふと空を見上げた。

飛んでいる戦闘機や爆撃機に光線が当たり、直後に消滅している。
おそらくこの世界とは異なる世界に移動させている。
そう直感で理解した僕は、走った。

「かつて人類が経験した神への冒瀆。今日...一度だけ、僕は『天に背く』。」

電車は途中の駅で止まった。
私は走った。薄らぐ記憶を頼りに。途中で自転車も借りた。
なんとかして都心にたどり着き、戦闘機が飛んでくる方向を見た。

やはり、あの巨大な塔。バベルの塔の方向だ。

本にも記されていた。

バベルの塔が建造された目的。それは自己の俯瞰。この世界が単一世界ではないことの証明をする装置。ということは、バベルの塔の真の目的は、平行宇宙干渉。

私は、息を切らし、それでも、あの塔があった場所へ、走った。

外付けの非常階段を駆け上り、途中で力尽きた。
僕はやはり弱い。弱いんだ。こんな自分から逃げてきた自分も弱い。

僅かな記憶を頼りにたどり着いた場所には、サインライズという名前の複合商業施設があった。もうここしかない。

決意を固め、逃げ惑う人々の中をかき分け、停止したビルのエレベーターを横目に階段を駆け上った。

走って。

走って。

走った。

20 階.....

35 階.....

目の前の視界が酸欠で暗くなる。それでも、諦めるという選択肢は最初から用意していなかった。

....屋上。

一気に視界が開けた。
ビルの屋上。そこから見える東京は、もはや火の海だった。

そして探した。
彼、知史を。

屋上の中央。すぐそばに、爆撃機が現れた。それはすぐにこのビルを標的とし、そのあとは一瞬だった。

ミサイルがビルに直撃し、足場がふわりと浮いたかと思うと、もう既にその時、足場は無かった。

「ごめん…。私…知史くんのこと助けられなかった…。」

私は薄々感じていた。知史くんの優しさ。そして、私を昔から知っていたという事実。彼は私の知らない私を知っていた。知史くんは私を「大切な人」と呼んだ。

「ごめん…ごめん……」

「遥花！！」

「え…！？」

上を向いた。視線をあげた。
そこに彼はいた。強く、私の手を握りしめて。

「もう大丈夫だ！遥花！」
力強くこう言った。

私と彼はそのまま引力の誘う方へ、地上へ、引き寄せられた。
落下する間際、彼はこう言った。

「あの本も、平行宇宙も、はじめは僕の想像だったんだ。だから、君も本当は僕の想像であるはずだった。けど、こうして会いに来てくれた。それだけでも僕は、十分幸せだ。」

今日この日、僕たちは、私たちは、人生に一度だけ、神様に、世界に、そして天に、

_____背く。

2020年10月9日